

9 臨地・臨床実習における喀痰吸引の現状と今後の課題

渡邊美幸

明倫短期大学 歯科衛生士学科

keywords : 喀痰吸引, 歯科衛生士, 教育

はじめに

保健・医療・福祉の現場において、歯科衛生士に求められる医学的・介護的ニーズは年々高まってきている。臨地・臨床実習の中でも全身疾患を持つ患者や利用者に接する機会は多く、医学的・介護的な知識はもちろん、さまざまな技術が要求されるようになってきている。平成24年4月から、「社会福祉士および介護福祉士法」の一部改正により、介護福祉士および一定の研修を受けた介護職員等においては、一定の条件の下で「痰の吸引等」の行為を実施できるようになった。その頃から、歯科衛生士教育においても、訪問歯科診療や歯科口腔介護、周術期における口腔機能管理等の場面で必要となる喀痰吸引等についての教育がクローズアップされてきた。そこで、臨地・臨床実習における喀痰吸引の現状を把握し、その結果から今後の課題を検討することを目的に、アンケートを実施した。

対象および方法

対象は、臨地・臨床実習が終了した平成29年度歯科衛生士学科3年生34名である。調査日は、平成29年11月24日である。方法は、一部自記式・多項目選択式質問紙法で行った。回収率は100%であった。アンケートの内容は、臨地・臨床実習期間内における喀痰吸引見学の有無、喀痰吸引を見学しての感想、現場で困ったこと、自分に足りない知識・技術および喀痰吸引習得の意志等である。

結果および考察

臨地・臨床実習期間内における喀痰吸引見学の有無は、「あり」が97.1%、「なし」が2.9%であった。喀痰吸引を見学しての感想は、「苦しそう」が70.6%、「苦しそう・つらそうだが必要な処置」が

64.7%、「つらそう」が50.0%であった。患者や利用者の苦しくつらそうな状況を目の当たりにし、その気持ちに寄り添う反面、医療従事者として必要な処置として捉えていることが伺える。また、現場で困ったことは、「疾患に対する知識不足」が79.4%、「全身状態の把握不足」、「喀痰吸引ができない」がそれぞれ47.1%であった。自分に足りない知識・技術は、「疾患の基礎知識」が88.2%、「一般的な介護技術」が55.9%、「コミュニケーション能力」が52.9%、「喀痰吸引の知識・技術」が50.0%であった。これらの結果から、疾患に対する基礎知識を深め、全身状態を把握しながら患者や利用者に関わることは必須であり、その教育が急務であると思われる。また、喀痰吸引ができないもどかしさも感じており、喀痰吸引習得の意志は、「学びたい」「どちらかといえば学びたい」と回答した者が91%であり(図1)、学生の積極的な姿勢が伺える結果となった。

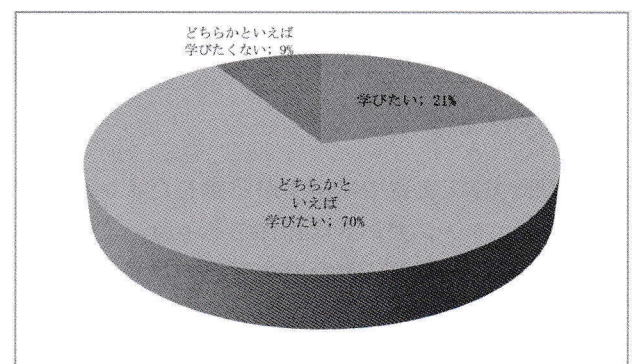


図1 喀痰吸引習得の意志 (n=34)

まとめ

本学でも平成28年度活性化補助金で吸引シミュレーターを購入していただいた。今後は専門的口腔衛生処置が安全に実施できるよう、歯科衛生士教育の中に取り入れていきたい。